

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22653057

研究課題名（和文） 日本のマイノリティ集団の越境的移動に関する研究

研究課題名（英文） The Study of Japanese Cross-Border Minorities

研究代表者

島 和博 (SHIMA KAZUHIRO)

大阪市立大学・人権問題研究センター・教授

研究者番号：50235602

研究成果の概要（和文）：近代日本の「移民史」を「越境するマイノリティ」の歴史という視点から再検討し、さらにはそれをふまえて、現在のブラジルの「日系（人）社会」における聞き取り調査を通じて、「越境するマイノリティ」の歴史と現状の一端を明らかにした。とりわけ、ブラジルにおける聞き取り調査を通じて、日系移民社会における原爆被爆者と女性の置かれている状況を明らかにし、また移民社会において「部落問題」がどのように語られているのかということも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, at first, we tried to review the history of Japanese immigrants from a perspective of 'cross-border minority'. In addition, we carried out intensive interviews with many people in Japanese communities of Brazil. Through this investigation, we made clear an aspect of history and situations about Japanese cross-border minorities. And this survey revealed circumstances of women and 'Hibakusya' in Japanese community. Moreover we unveiled a manner of stealth talking about 'Burakumin' in Japanese community of Brazil.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	0	1,100,000
2011 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,600,000	450,000	3,050,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：差別・排除、マイノリティ、移民、ディアスポラ

## 1. 研究開始当初の背景

マイノリティ研究を「ディアスポラ」論という視点から行う研究は、アメリカにおいてはかなりの蓄積があるが（『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』のなかの戴エイカによる第1章、第2章の論稿を参照）、日本にお

いてはまだまだほとんど未開拓の領域であった。通常、ディアスポラという概念は、「国境を越える移動」を意味しているが、野口はその概念から「国境」というファクターをはずして、ディアスポラ概念の一般化とその適用範囲の拡大を試みると同時に、このディアスポラ概念を「マイノリティの経験」を総括

するためのキー概念として再構成することを提起している。ディアスポラは、1つのオリジナルな中心から放逐されて、周縁的な場所に追いやられ、そこで居着いた場所（ホスト社会）でも、完全に受け入れられることがなく、疎外感や屈辱感をもっている、そのような存在である。ホスト社会に中心を求めることもできず、そうかといってホームランドに中心を求めることもできない、そのような存在である。このような「ディアスポラとしてのマイノリティ」は、それゆえ、何らかの既存の共同体への一体化であるとか、アプリアリな共通感情に基づく連帯といったものからは、疎外された存在である。それは、一つの中心に安住することの不可能な存在あり、必然的に、複数の中心へと分断された存在として、あるいはいかなる中心をもつことのできない存在として生きざるを得ない。このような存在としてマイノリティをとらえることによって、マイノリティの越境的な移動の諸経験を既存社会への批判と抵抗の実践としてとらえることが可能となる。そして同時に、マイノリティ問題を、その本質主義的なくびきから解放して、新しい地平（マイノリティに共通の「移動」の経験というコンテクスト）において認識・研究することが可能となる。これによって、諸マイノリティ（問題）の本当の意味での比較研究も可能となるであろう。本研究はこのような「批判的ディアスポラ」論を基礎的な理論枠組みとして設定したうえで、それに基づいて、日本におけるマイノリティ諸集団の越境的な移動の諸相を（とりわけ今回は「移民」という領域に焦点をあわせて）実証的に解明することをめざしてた。

## 2. 研究の目的

今回の研究は日本におけるさまざまなマイノリティ集団の「移民」という現象にフォーカスしている。マイノリティを移民へと駆り立てた日本社会の現実とはどのようなものであったのか、あるいはマイノリティが移民という越境的移動によって獲得・達成しようと企図したものは何だったのか、さらには移民した先で、マイノリティはどのような新たな社会関係に組み込まれ、あるいはどのような社会関係を構築したのか、こうしたことを解明することによって、マイノリティ集団の形成や変容、その同化と異化のダイナミクス、マイノリティ諸集団間の連携や対立、その「共生」と混淆、などのこれまでのマイノリティ研究において注目されることの少なかつたイシューについて、新しい視点から捉えなおすことが可能となる。多かれ少なかれ被差別と被抑圧の状況におかれてきたマイノリティが、そうした状況への抵抗とそこか

らの脱出の試みとして、繰り返し越境的移動を企ててきたのだとすれば、彼ら・彼女らのそうした企図と実践を丹念に追うことによって、従来のマイノリティ研究がほとんど注目することのなかつた、マイノリティの「生きた現実」の諸側面を浮かび上がらせることができるであろう。マイノリティを、彼ら・彼女らの越境的移動の経験という側面から把握することは、多かれ少なかれ本質主義的な視点から個別分断的に理解・研究されてきた従来のマイノリティ諸問題を、より広く普遍的なコンテクストでとらえなおすことを可能とする。マイノリティ（集団）を本質化してしまってきた従来の研究が決定的に見落としてきたのは、このマイノリティの世界の潜在的・顕在的な開放性である。被差別部落民、在日朝鮮人、棄民化された（元）炭坑労働者、こうした人々のさまざまな越境的移動の諸経験を総括することによって、諸マイノリティ集団の個別的な問題状況を貫いてその基底に潜む越境的移動への志向や願望を、さらにはその実践を、ひとつの解放的な力（実践）として正当に評価するという視点が確立される。被差別部落民の戦前・戦中の満州移民は、水平社運動のなかでは、差別からの逃避だと考えられ、移民問題は等閑視されてきた。また在日朝鮮人問題においては、戦後の冷戦体制と南北統一問題の陰にかくれて、移民問題は重視されてこなかつた。

（元）炭坑労働者の移民も「棄民」として語られることはあつたが、その主体的能動的取り組みとしての側面は見落とされてきた。これらにおいて一貫して見落とされてきたのは、「ディアスポラ」としてのマイノリティの内部に潜む、「解放」への願望である。そして、本研究が最終的にめざしているのはこうしたマイノリティの志向・願望を正当に繰り込みうる「批判的ディアスポラ」論の構築である。

## 3. 研究の方法

（1）近代日本における「移民の歴史」を「マイノリティの越境的移動」という視点から再構築するための作業を行った。具体的には、明治期から戦前にかけてのアメリカ、および1920年代から1960年代へかけてのブラジルへの被差別部落からの移民について、それがどれぐらいの規模であつたのか、またそうした部落民の移民という事実の背後にはどのような被差別部落の現実があつたのかといった基本的な事柄について、既存の文献や当時の新聞記事、融和団体の機関誌、行政資料などを収集と読解を通じて、解明を試みた。特に、戦後移民に関しては、都道府県別の「移民者名簿」の詳細な分析（特に和歌山県と福岡県について）を試み、そこから、移民を送

り出す地域社会の状況について研究を進めた。

(2) 現在も移民一世が存命であるブラジルにおいて、日本での生活の記憶や当時の日本におけるマイノリティの置かれていた状況についての記憶を保持している、ブラジル在住の日系移民の人々を対象に、主として、「部落問題」への認識や、人権意識などをテーマとして聞き取り調査を行った。また、この調査の過程で、ブラジルにおける日系被爆者の人たちの運動に出会い、彼(彼女)らへの聞き取り調査をも実施し、またその活動に関する資料等の収集も行った。

#### 4. 研究成果

(1) 二年間の研究を通じて明らかになったまず第一点目は、従来の移民(史)研究には大きな盲点があったということである。これまでの関連分野の研究の網羅的なサーベイの結果、「マイノリティ論」や「社会階層論」の視点を織り込んだ移民(史)研究はきわめて貧弱であり、その結果、「移民」もしくは「移住」という人々の営みを、日本社会の具体的な状況やその変動と関連させて明らかにするという研究がなされていないことが明らかになった。移民(史)研究の空白部分が明らかになり、そこに新たな研究課題を見出したということ、これが今回の研究の第一の成果である。

(2) 戦後の「移民者名簿」の詳細な分析を通じて、移民者の出身地域にはかなり大きな偏りがあることが明らかになった。今回は、主として歴史的に移民者の多い和歌山県と福岡県を対象に、移民者の出身地域別分布を分析したのだが、この結果、移民者は当該都道府県に均等に分布しているのではなく、そこにはかなり大きな地域的偏りがあることが明らかになり、このことから、人々を移民へと駆り立てた要因(のひとつ)が地域社会の構造にあるということが明らかになった。この地域社会のあり方と移民排出との具体的な関連の内実については、いまだその詳細を明らかにするには至っていないが(現在も分析を続行中である)、たとえば被差別部落や旧産炭地域と移民排出との間には密接な関連があることが予想され、これらをより詳細に分析することによって、移民(史)研究の新たな研究領域が開かれると予想される。

(3) ブラジルの日系人社会(主として「県人会」)における聞き取り調査を通じて明らかになったのは、まず第一に、そこにはきわめて濃厚に純粋な「日本人性」が維持・保存されているという現実であった。さまざまなイベントや教育・啓発活動を通じて、「日本人であること」の大切さの確認の作業が不断

に行われており、そこにはブラジル社会に「同化」することへの根深い拒否感や、「同化」した(それゆえ日本語を話せない)日系人に対する「蔑視」さえうかがわれた。こうしたいわば「本質主義的な」日本人性を維持していこうとするブラジルの日系人社会においては、それゆえ、当然にも日本社会の(古い)価値意識や規範意識が濃厚に維持・保存されており(特にこの傾向は「県人会」のリーダー層において濃厚)、このような「閉鎖的」な環境においては、たとえば「部落問題」などに関しても、かなり「因習的な」意識が維持されていることが確認できた。もちろん、「部落問題」や「部落民」があからさまに語られることはほとんどないのだが、しかしもう一方では、「密やかに」それらは語られ、流通していることも確認できた。

(4) しかし同時に、ブラジルにおいて日系人の「同化」が急速に進行しているという事実もまた確認できた。これは、現象的には高齢の移民第一世代と若年層(移民の二世・三世)との間の意識や行動のギャップとして表れており、このことが日系人社会(具体的には「県人会」等の日系人コミュニティ)における大きな問題として出現しつつあることが確認された。たとえば、県人会の集まりや会議において、もはやそれらを日本語だけで行うことが困難になりつつある県人会が多数みだされており、このことが県人会運営をきわめて困難なものにしつつある。その意味では、ブラジルの日系人社会は現在、大きな過渡期に際会しているということは確かであり、こうした状況にあって、ブラジルの日系人の「日本人性」や、さらには「マイノリティ」集団へのまなざしも大きく変容しつつある、ということを確認することができた。

(5) 今回のブラジルにおける聞き取り調査の過程で、私たちは、これまで(少なくとも日本では)あまり注目されることのなかったブラジルの原爆被爆者の活動と出会うことができた。県人会の活動とは全く独立に1980年代の中頃から始まった「ブラジル被爆者平和協会」の運動は、国境を越えたマイノリティの権利獲得運動として、きわめて注目し得るものである。今回のブラジルでの調査の過程で、この「ブラジル被爆者平和協会」に参集している会員10数名のインタビュー調査を行い、そこから多くの知見を得ることができた。「県人会」という既成の組織が全く取り組むことのなかった「被爆者」問題を、日本国内や韓国・北米等の被爆者とも連携しながら、自らの権利を獲得しようとする運動は、従来の「県人会」を中心とした日系人の「運動」(その多くは日本の出身都道府県の行政機関への「請願」運動)とは、まったく性格を異にする運動である。さらには、その運動は現在、「ブラジルの被爆者救済」とい

う個別の利害を超えて、「反核運動」、「平和運動」へと向かっており、こうした運動の「普遍性」は、グローバル化しつつある現代社会におけるひとつの「あるべき」社会運動の方向性を指し示していると考えられる。

(6) 以上、今回の研究から得られた「成果」について5点にまとめて報告したのだが、これらの「成果」はいずれも新たな研究課題の存在を明らかにしたものであって、その意味では今回の研究はまさしく「萌芽」的なものであった。これらの新たに見出された研究課題をさらに遂行していくことが現在と今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 野口道彦、「ブラジル日系コロニアと部落問題-----部落問題は、どのように語られてきたのか?-----」、人権問題研究センター紀要「人権問題研究」、査読なし、Vol.12、2012年7月(発行予定)、ページ未定
- ② 島和博「ブラジルにおける日系人被爆者-----その現状と課題-----」、人権問題研究センター紀要「人権問題研究」、査読なし、Vol.12、2012年7月(発行予定)、ページ未定
- ③ 朴育美、『ケナリも花、サクラも花』のナラティブ分析が顕在化させる日本社会のディスコースの前提」、2011年9月、関西外国語大学研究論集、査読なし、No94、p.13-26

[その他]

ホームページ等

人権問題研究センターの「ワーキング・ペーパー」シリーズにおいて、ブラジルでの聞き取り調査結果の報告等が発表されている。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

島和博 (SHIMA KAZUHIRO)

大阪市立大学・人権問題研究センター・教授

研究者番号：50235602

### (2) 研究分担者

野口道彦 (NOGUCHI MICHIHIKO)

大阪市立大学・人権問題研究センター・特

任教授

研究者番号：00116170

上杉 聡 (UESUGI SATOSHI)

大阪市立大学・人権問題研究センター・特別研究員

研究者番号：60573673

古久保 さくら (FURUKUBO SAKURA)

大阪市立大学・人権問題研究センター・准教授

研究者番号：20291990

朴 育美 (PAKU IKUMI)

関西外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：90564534

### (3) 連携研究者

なし